地域まちづくり

～創意工夫のまちづくり～

浅野　健

地域まちづくり

従来のまちづくりは、行政が主体となって道路や公園などの整備や管理、都市や建築に関する規制などを行ってきた。しかし、同じ市町村内でも場所によって地域の魅力や課題が違い、行政が一律にまちづくりを進めるだけでは解決できない問題が生じるようになってきている。そこで、近年は地域住民と行政が知恵を出し合って地域のまちづくりルールを決めたり、建物や道路、公園の空間運営などをする「地域まちづくり」が各地で展開されつつある。

関わりは公園づくりから

スペーシアが地域まちづくりに関わり始めたのは一九九〇年代後半、名古屋市北区、港区での公園づくりである。住民の方々と共に何度もワークショップを行い、いろんなアイデアの詰まった整備案を作成し、完成した公園に貼る絵タイルづくりも行った。二〇〇〇年代以降は土地利用計画・構想づくり、景観形成など他の分野でも地域まちづくりに関わってきた。また、地域まちづくりを実施する団体等の事務局支援も行っており、過去には久屋大通オープンカフェ推進協議会など、現在は四間道・那古野界隈まちづくり協議会、御剱地区防災まちづくり協議会などに関わっている。

創意工夫のまちづくり

地域まちづくりにおけるスペーシアの関わりは、行政を通じての関わり、直接団体を支援する場合など様々である。いずれも地域のニーズをきめ細かく捉えて創意工夫のまちづくりが実現できるよう努めてきている。特に地域の歴史文化や課題はその地域の住民の方々から学ぶことが多く、その改善に向けて既に取り組んでいる事例が全国を探せば見出せるケースもある。常にアンテナを張り巡らせながら、地域まちづくりに今後も関わっていきたい。

人間らしさを取り戻す豊かな環境・空間づくり

～交通・環境分野から～

櫻井　高志

交通分野、環境分野は専門コンサルが以前から多々ある中で、スペーシアではここ十年余りで少しずつ実績を積み上げてきた。個人的関心も強く、また、まちづくりの全体的ビジョンから具体的分野の検討に進む際に当然求められる領域として、身に付けてきた部分でもある。

社会が成熟化し、今後人口減少を迎える中、モータリゼーションや市街地拡大など経済効率優先の社会から転換し、ヒューマンスケールなまちで人間らしく生きられるように、豊かな環境や空間を再構築していくことが重要である。その切り口として、人の暮らしとまちの営みの基礎となる交通、そして、それらに健全さと潤いを与える緑や水、エコといった環境分野の果たす役割は大きい。

これまでの実績は、交通分野では、交通まちづくりプランや、道路など公共空間の使い方、駅前広場やバスターミナルといった交通施設などの検討、ちょい乗りバスや水上交通、オープンカフェなどの社会実験がある。地域密着コンサルとして、市民を巻き込みながら、人が主役の交通や空間のあり方について考え、また、環境分野では、まちの緑化や公園設計、里山活用など人が触れ合うみどりや自然のあり方について考えてきた。

今後も新しい視点で取り組みたいテーマは多い。クルマから徒歩への転換による道路空間再配分の中で緑や広場・賑わいをどう創出するか、都市化の影に埋もれた水辺や緑・生き物と都市との関係をどう回復するか、市街地が縮退する中で緑や里山を再生し都市を含めた新たな循環をどう創出するかなどである（個人的には川など水辺を取り上げたい）。豊かな環境・空間づくりに通底するものは皆の幸せ。そこを忘れずに進んでいきたい。

地域資源を活かす

～ストックの有効活用～

石田　富男

歴史を活かしたまちづくり

地域固有の風景をつくりだし、住民のまちに対する愛着を高める上で「歴史」は重要なテーマだ。レトロが人気を呼び、さびれたまちが観光のまちに変貌し賑わっているところもある。

歴史を活かしたまちづくりの重要性が高まり、その条件も整ってきていると思われるが、一方で貴重な歴史資源が失われてきているのも現実である。また、観光客で賑わうことにより、そのまちの持つよさが失われてしまうというケースもみられる。

スペーシアは歴史をテーマとするまちづくり計画の策定に関わるほか、愛知登文会の活動支援などを通じて歴史的建築物の持つ魅力を肌で感じてきた。保存・活用に関心を持つ多くの専門家とのネットワークも広がっている。これらの経験とネットワークを活かし、計画づくりのみならず、具体の保存・活用の支援にも取り組んでいきたい。

空き家の利活用

空き家が急増し、放置された空き家が周辺に悪影響を及ぼすことが大きな問題となっているが、そのような状況を生みださないためにも空き家の利活用が重要になっている。

歴史的建築物の空き家は地域資源として理解されやすいが、そうではない空き家に関しても大きなコストがかからずに活用できるという点で地域資源といえ、新たな入居者を迎えたり、地域の交流の場となることで地域の活性化につながる。

空き家所有者を対象としたアンケート結果からはその対処に悩む姿が浮かび上がってくる。地域のまちづくりの中で空き家が有効に活用されることが、地域にとっても所有者にとっても望ましいと考えられる。その点を意識しながら空き家問題に取り組んでいきたい。

都市のあるべき姿を提示する

～人口減少時代の都市計画・まちづくり～

石田　富男

七十五年で倍増、そして半減

日本では二〇〇五年までの七十五年かけて倍増した人口が七十五年かけて半減する。長い日本の歴史の中で極めて異常な状態にあるのが現代であるといえる。無秩序に拡大してしまった都市を縮小しなければならないのは必然の流れだ。

しかし、今はまだ変化が小さいためにそのことの意味を理解できていない人が多く、必要性を感じている人でも強制的な縮退は無理だとあきらめている。

地方創生の総合戦略の前提となる人口ビジョンでは市町村として夢のある計画にしなければという呪縛から各市町村の将来人口を合計すると全体としてありえない数値となりそうだ。

現実にそぐわない計画は無駄な投資によって逆に地方の衰退を招くことになるのではと危惧する。居住に適さない地域に関しては居住を制限することまで考えないといけない。災害の危険性の高い区域のみならず、著しい高低差のある住宅地などもその対象にすべきだと思う。

広域的視点からの都市計画

スペーシアは都市マスなど法定計画の実績は少ないものの名古屋市の駅そばまちづくりや交通まちづくりの調査なども担当してきた。都市のあるべき姿を提示する計画策定の重要性は高まっていると感じており、意欲的に取り組んでいきたい。

全国横並びで計画が策定される場合、大手コンサルが入札で多くを受託するケースが多い。プロポーザルでも実績が重視され、スペーシアではその点で劣るが、地域密着で地域に精通しているという点を活かした提案をしていきたい。

このような虫の目とともに重要なのは鳥の目。広域的な視点からの客観的な提案も必要だ。この点は都道府県計画に期待する部分でもある。市町村では踏み込めない縮退の具体的方向性を示す役割も提案していきたい。